

# 部分論理関数とドントケア

- 部分論理関数：定義域が部分的な関数
  - 入力値に意味が無い場合がある
  - ドントケア入力

例

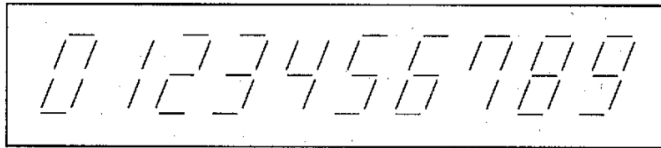


図 3.10 数字の7線分素子表示

$x_3x_2x_1x_0$	$f_1$	$f_2$	$f_3$	$f_4$	$f_5$	$f_6$	$f_7$	線分素子表示
0 0 0 0	1	1	1	0	1	1	1	0:
0 0 0 1	0	0	1	0	0	1	0	1:
0 0 1 0	1	0	1	1	1	0	1	2:
0 0 1 1	1	0	1	1	0	1	1	3:
0 1 0 0	0	1	1	1	0	1	0	4:
0 1 0 1	1	1	0	1	0	1	1	5:
0 1 1 0	1	1	0	1	1	1	1	6:
0 1 1 1	1	1	1	0	0	1	0	7:
1 0 0 0	1	1	1	1	1	1	1	8:
1 0 0 1	1	1	1	1	0	1	1	9:

	$x_1x_0$			
$x_3x_2$	00	01	11	10
00	1			1
01				1
11	*	*	*	*
10	1		*	*

ドントケア入力での出力は\*と書く  
最簡形が簡単になるように\*を0,1  
好きなように読む  
(1110, 1010)を1, その他を0と読むと良い

1010-1111の範囲の入力には意味が無い

# 論理関数の簡単化

$$T(f) = \cup_{p_j \in Q} T(p_j) \quad Q \subseteq P_j$$

(a)  $|Q|$  が最小

(b) 式全体で使われるリテラルの個数が最小  
( $|Q|$ が同じ組み合わせが複数あったら)

- カルノー法
  - 3～6 変数に適用可能
  - 分かりやすいけど、見落としなどミスもある
- クワイン・マクラスキ法
  - 変数が多くても大丈夫
  - プログラムしやすい
- コンセンサス法など他にも多数の方法がある

# クワイン・マクラスキ法のための準備

- 部分積項の系列表現

- 部分積項を「0, 1, -」で書く書き方
- 肯定リテラルを1、否定リテラルを0、無い変数を-で書く
  - 例：5変数  $x_1\bar{x}_2x_4 \rightarrow 10-1-$

- 併合： 1文字違う系列表現ペアを併せて違うところを-に置き換え

- $\bar{x}_1\bar{x}_2x_3\bar{x}_4\bar{x}_5 \rightarrow 00100$
- $\bar{x}_1\bar{x}_2x_3\bar{x}_4x_5 \rightarrow 00101$
- 併合後：  $0010- \rightarrow \bar{x}_1\bar{x}_2x_3\bar{x}_4$

- 「0010-」と「0110-」を併合すると「0-10-」となる

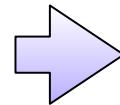
- 併合の結果は部分積項よりリテラルが減っている

クワイン・マクラスキ法とは「併合可能なペア」を系統的に探して、順に併合し、リテラルを減らして簡単にしていく方法である

# QM法前半

1. 真理値表（or 真入力ベクトル）から対応する積項系列表現を作る
2. 積項系列表現の 1 の個数毎に並べ替える（k表）
3. 併合可能なペアを捜す
  - 併合可能なものは 1 文字違いなので、1 の個数が 1 違う所を見る
4. 併合したペアの積項系列表現を記し、併合したペアをチェック√
5. 併合可能なペアがなくなるか全てチェックされるまで繰り返す
  - k++して、ステップ2に戻るか、終了する

x1	x2	x3	f
0	0	0	0
0	0	1	1
0	1	0	0
0	1	1	1
1	0	0	1
1	0	1	0
1	1	0	1
1	1	1	1



0 表	1 表
001 ✓	
100 ✓	0-1
011 ✓	1-0
110 ✓	-11
111 ✓	11-

さらに併合可能なペア無し

この段階でチェックされず  
に残っている積項が主項に  
対応する

全てチェックしたのでk+1表に移行



## QM法後半：主項表

6. 最終的に残った積項（主項）から主項表を作る
7.  $m_i \leq p_j$  となる組み合わせを主項表から探す（×）
8. 縦に見て、×が1つの列を探す→×がある所が必須主項に対応
9. 必須主項で覆われている最小項を消す
10. 残った最小項があれば、残りの主項からリテラルが少ないものを採用して、全ての最小項が覆われる組み合わせを探す
  - 必須主項と採用した主項の和を取り最簡形を得る

主項( $p_j$ ) ↓	$\bar{x}_1\bar{x}_2x_3$	$\bar{x}_1x_2x_3$	$x_1x_2\bar{x}_3$	$x_1x_2x_3$	$x_1\bar{x}_2\bar{x}_3$ ← 最小項 $m_i$
$\bar{x}_1x_3$	×	×	×		
$x_1\bar{x}_3$		×	×		×
$x_2x_3$		×		×	
$x_1x_2$			×	×	

$$f = \bar{x}_1x_3 + x_1\bar{x}_3 + x_1x_2 \quad \text{or} \quad f = \bar{x}_1x_3 + x_1\bar{x}_3 + x_2x_3$$

## もう少し複雑な例

$$T(f_2) = \{00110, 00100, 01100, 11100, 10010, 10100, 00011, 00111, 00101, 01001, 01011, 01101, 11111, 11101, 10011, 10111, 10101\}$$

[0]			[1]			[2]			[3]		
a.	00100	✓	a-c.	0010-	✓	ac-di.	001--	②	1-4.	--10-	①
b.	00011	✓	a-d.	001-0	✓	ac-fk.	0-10-	1✓	2-5.	--10-	:1-4
c.	00101	✓	a-f.	0-100	✓	ac-hm.	-010-	2✓	3-6.	--10-	:1-4
d.	00110	✓	a-h.	-0100	✓	ad-ci.	001--	:acdi			
e.	01001	✓	b-i.	00-11	✓	af-ck.	0-10-	:acfk			
f.	01100	✓	b-j.	0-011	⑥	af-hn.	--100	3✓			
g.	10010	✓	b-l.	-0011	✓	ah-cm.	-010-	:achm			
h.	10100	✓	c-i.	001-1	✓	ah-fn.	--100	:afhn			
i.	00111	✓	c-k.	0-101	✓	bi-lo.	-0-11	③			
j.	01011	✓	c-m.	-0101	✓	bl-io.	-0-11	:bilo			
k.	01101	✓	d-i.	0011-	✓	ci-mo.	-01-1	④			
l.	10011	✓	e-j.	010-1	⑦	ck-mp.	--101	6✓			
m.	10101	✓	e-k.	01-01	⑧	cm-io.	-01-1	:cimo			
n.	11100	✓	f-k.	0110-	✓	cm-kp.	--101	:ckmp			
o.	10111	✓	f-n.	-1100	✓	fk-np.	-110-	5✓			
p.	11101	✓	g-l.	1001-	⑨	fn-kp.	-110-	:fknp			
q.	11111	✓	h-m.	1010-	✓	hm-np.	1-10-	4✓			
			h-n.	1-100	✓	hn-mp.	1-10-	:hmnp			
			i-o.	-0111	✓	mo-pq.	1-1-1	⑤			
			k-p.	-1101	✓	mp-oq.	1-1-1	:mopq			
			l-o.	10-11	✓						
			m-o.	101-1	✓						
			m-p.	1-101	✓						
			n-p.	1110-	✓						
			o-q.	1-111	✓						
			p-q.	111-1	✓						

表 3.7 クワイン - マクラスキ法の適用例

# 例の続き

	a.	b.	c.	d.	e.	f.	g.	h.	i.	j.	k.	l.	m.	n.	o.	p.	q.	
① --10- :acfk-hmnp	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 1-fhn
② 001-- :acdi	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 2-d
③ -0-11 :bilo										x		x			x			
④ -01-1 :cimo			x						x				x		x			
⑤ 1-1-1 :mopq	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 5-q
⑥ 0-011 :bj		x								x								
⑦ 010-1 :ej					x					x								
⑧ 01-01 :ek					x					x								
⑨ 1001- :gl	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 9-g
被覆数	2	2	3	1	2	1	1	1	3	2	2	2	3	1	3	2	1	
被覆 by 必須	1,2	↑	1,2	2	↑	1	9	1	2	↑	1	9	1,5	1	5	1,5	5	

表 3.8 主項表

10.残った最小項があれば、残りの主項からリテラルが少ないものを採用して、全ての最小項が覆われる組み合わせを探す

$$(U_3 + U_6)(U_7 + U_8)(U_6 + U_7) = U_3U_7 + U_6U_7 + U_6U_8$$

主項関数： $U_i$   $i$ 番目の主項を使う

今の場合はどの組み合わせも積項の数が2つなので、リテラルの少ないものを選ぶ

$|p_3| = 3, |p_6| = 4, |p_7| = 4, |p_8| = 4$  だから、 $U_3U_7$  の組み合わせが最も短い

$$f_2 = x_3\bar{x}_4 + \bar{x}_1\bar{x}_2x_3 + x_1x_3x_5 + x_1\bar{x}_2\bar{x}_3x_4 + \bar{x}_2x_4x_5 + \bar{x}_1x_2\bar{x}_3x_5$$

## ここまでのまとめ：論理関数の簡単化

$$T(f) = \cup_{p_j \in Q} T(p_j) \quad Q \subseteq P_j$$

(a)  $|Q|$  が最小

(b) 式全体で使われるリテラルの個数が最小  
( $|Q|$ が同じ組み合わせが複数あったら)

- カルノー法

- 3～6 変数に適用可能
- 分かりやすいけど、見落としなどミスもある

- クワイン・マクラスキ法

- 変数が多くても大丈夫。ただし、 $n2^n$ 程度のメモリが必要なので大きな  $n$  では無理
- プログラムしやすい

次ページの練習問題(1)、(2)をQM法で解くこと(レポート)



# 練習問題

(1) 以下のカルノー図で表される論理関数をクワインマクラスキ法で簡単化しなさい

$f_3:$	$w = 0$	$zv$		$w = 1$	$zv$				
$xy$	00	01	11	10	$xy$	00	01	11	10
00	1		1	1	00	1		1	1
01		1			01		1	1	
11	1	1	1	1	11		1	1	
10	1			1	10	1			1

(2) 以下の論理関数をクワインマクラスキ法で簡単化しなさい

$$f(x, y, z, w) = \bar{x}\bar{y}z\bar{w} + \bar{x}\bar{y}zw + \bar{x}y\bar{z}w + \bar{x}yz\bar{w} + x\bar{y}\bar{z}w \\ + \bar{x}yzw + x\bar{y}zw + xy\bar{z}w$$

# 論理式

- 形式的定義（3回目でやった）

1.  $0, 1$ , 変数は論理式である
2.  $E, F$  が論理式の時、 $\overline{E}, (E \cdot F), (E + F), (E \oplus F)$  は論理式である
3. 以上の（１）、（２）だけでできるものが論理式である

基本演算子→論理式の性質→式の変形操作

- ここでは逆の見方をする（代数系）

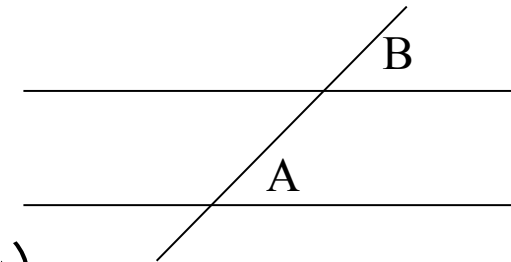
式の変形操作→論理式の性質→論理演算子

- 代数系での定義の流れ

1. 演算子と元の集合を指定する
2. 公理系を定める（この公理系が演算子の意味を定める）

# 公理とは？

- 他の命題を導くための前提
  - 真実である必要はない
- 公理主義数学
  - 公理から全てを導き、全体として矛盾のない体系を作る
  - 例：ユークリッド幾何学の第5公理
    - 平行線の錯角は等しい( $A=B$ )
    - 平面では正しいが球面では成立しない
      - 非ユークリッド幾何学



# モデル

- モデルとは、抽象代数において対象集合を特定し、演算子を公理系を満たす関数として特定したもの
  - 例 1 :  $\langle B; \cdot, +; 1, 0 \rangle \rightarrow$  今までやってきた論理関数
  - 例 2 : 命題論理
    - 知識を真偽の決まる文として表現 : 「1 は奇数である」
  - 例 3 : 集合論
- ブール代数の公理系を満たすモデルは沢山ある

# 公理系の例：ブール代数の公理系

- 演算子と元が具体的に何であることを特定しない抽象代数

【ブール代数の公理系】<sup>†</sup> ( $x, y, z \in B$ )

- |              |  |   |
|--------------|--|---|
| (1) 単位元      | $x \cdot 1 = x,$                               | $x + 1 = 1.$                                |
| (2) 零元       | $x \cdot 0 = 0,$                               | $x + 0 = x.$                                |
| (3) べき等律     | $x \cdot x = x,$                               | $x + x = x.$                                |
| (4) 交換律      | $x \cdot y = y \cdot x,$                       | $x + y = y + x.$                            |
| (5) 結合律      | $x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z,$   | $x + (y + z) = (x + y) + z.$                |
| (6) 吸収律      | $x \cdot (x + y) = x,$                         | $x + (x \cdot y) = x.$                      |
| (7) 分配律      | $x \cdot (y + z) = (x \cdot y) + (x \cdot z),$ | $x + (y \cdot z) = (x + y) \cdot (x + z).$  |
| (8) 相補律      | $x \cdot \bar{x} = 0,$                         | $x + \bar{x} = 1.$                          |
| (9) 二重否定     | $\bar{\bar{x}} = x.$                           |   |
| (10) ド・モルガン律 | $\overline{x \cdot y} = \bar{x} + \bar{y},$    | $\overline{x + y} = \bar{x} \cdot \bar{y}.$ |

演算子が公理系から定義されている点に注意

例：演算子 $\bar{\phantom{x}}$ が相補律から定義されている

# ブール代数の公理系の特徴

- 冗長：他の公理から導ける公理がある

- 例： (6) 吸収律  $x \cdot (x + y) = x$

$$x \cdot (x + y) = xx + xy = x(1 + y) = x$$

(7) 分配律      (3) べき等律      (1) 単位元

- 双対性：  $\cdot$  と  $+$ ,  $0$  と  $1$  を入れ替えると対になる式が公理に含まれる

【ブール代数の公理系】<sup>†</sup> ( $x, y, z \in B$ )

(1) 単位元	$x \cdot 1 = x,$	$x + 1 = 1.$
(2) 零元	$x \cdot 0 = 0,$	$x + 0 = x.$
(3) べき等律	$x \cdot x = x,$	$x + x = x.$
(4) 交換律	$x \cdot y = y \cdot x,$	$x + y = y + x.$
(5) 結合律	$x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z,$	$x + (y + z) = (x + y) + z.$
(6) 吸収律	$x \cdot (x + y) = x,$	$x + (x \cdot y) = x.$
(7) 分配律	$x \cdot (y + z) = (x \cdot y) + (x \cdot z),$	$x + (y \cdot z) = (x + y) \cdot (x + z).$
(8) 相補律	$x \cdot \bar{x} = 0,$	$x + \bar{x} = 1.$
(9) 二重否定	$\bar{\bar{x}} = x.$	
(10) ド・モルガン律	$\overline{x \cdot y} = \bar{x} + \bar{y},$	$\overline{x + y} = \bar{x} \cdot \bar{y}.$

$\longleftrightarrow$  双対 (dual) な式

# 非冗長な公理系：ハンチントンの公理系

【ハンチントンの公理系】 ( $\mathcal{B}$  はこの公理系で定義される要素の集合である.)

- (1) (非自明性)  $x \neq y$  となる  $x, y \in \mathcal{B}$  が少なくとも 1 組存在する.
- (2) (演算子)  $x, y \in \mathcal{B}$  ならば,  $x \cdot y \in \mathcal{B}$ ,  $x + y \in \mathcal{B}$ .
- (3) 交換律  $x \cdot y = y \cdot x$ ,  $x + y = y + x$ .
- (4) 分配律  $x \cdot (y + z) = (x \cdot y) + (x \cdot z)$ ,  $x + (y \cdot z) = (x + y) \cdot (x + z)$ .
- (5) 単位元・零元  $x \cdot 1 = x$ ,  $x + 0 = x$  となる要素  $1, 0$  が  $\mathcal{B}$  に存在する.
- (6) 相補律  $x \cdot \bar{x} = 0$ ,  $x + \bar{x} = 1$  となる  $\bar{x} \in \mathcal{B}$  が存在する.

- 冗長でない
- ブール代数の公理系はハンチントンの公理系から導くことが出来る
  - 結合律すら証明の対象: (5) 結合律  $x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z$ ,  $x + (y + z) = (x + y) + z$ .
  - 証明は教科書108ページ

## 参考：ANDとXORの公理系

- ORの代わりにXOR

- $x + y = x \oplus y \oplus xy$  で置き換え可能

【可換環・体の公理系】<sup>†</sup> ( $x, y, z$ は対象集合の元である.)

(R1) 交換律  $x \oplus y = y \oplus x$  ,  $x \cdot y = y \cdot x$  .

(R2) 結合律  $x \oplus (y \oplus z) = (x \oplus y) \oplus z$  ,  $x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z$  .

(R3) 分配律  $x \cdot (y \oplus z) = (x \cdot y) \oplus (x \cdot z)$  ,  $(y \oplus z) \cdot x = (y \cdot x) \oplus (z \cdot x)$  .

(R4) 零元・単位元  $x \oplus 0 = x$  ,  $x \cdot 1 = x$  .

(R5) 逆元 (加法)  $\forall x$  ;  $x \oplus y = 0$  を満たす解  $y (= -x)$  が存在する.

(F5) 逆元 (乗法)  $\forall x \neq 0$  ;  $x \cdot y = 1$  を満たす解  $y (= x^{-1})$  が存在する.



# 完全系（万能な系）

- 任意の論理関数は{NOT, AND, OR}で書く事ができた

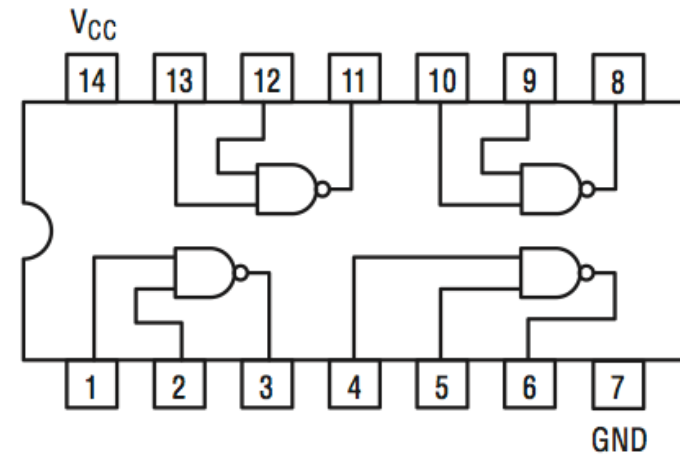
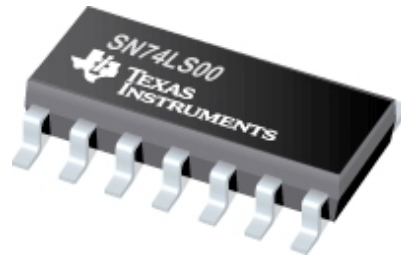


- {NOT, AND, OR}は完全系（万能な系）であると呼ぶ
- **完全系**：すべての論理関数を表現できる代数系
  - 以下の系を始め多くの完全系がある
    - {NAND}
    - {NOR}
    - {EXOR, AND, 1}
    - {P, M, 1, 0} (P: パリティ関数、M: 多数決関数)
- **極小完全系**：それ以上演算子を減らせない系
  - 例：+は  $x + y = \bar{x} + \bar{y} = \overline{\bar{x} \cdot \bar{y}}$  によりNOTとANDに置き換え可能なので、{NOT, AND}も万能で、これ以上は減らせないので、極小完全系。
  - 同様に{OR, NOT}、{NOR}、{NAND}なども極小完全系

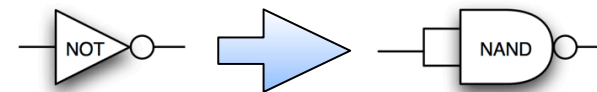


# NANDの完全性

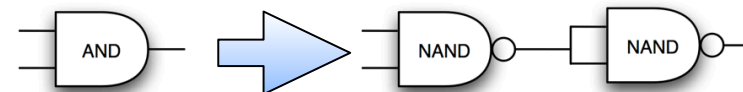
- SN74LS00 (型番的に一番基本的な回路)
  - NANDが4個入ったIC



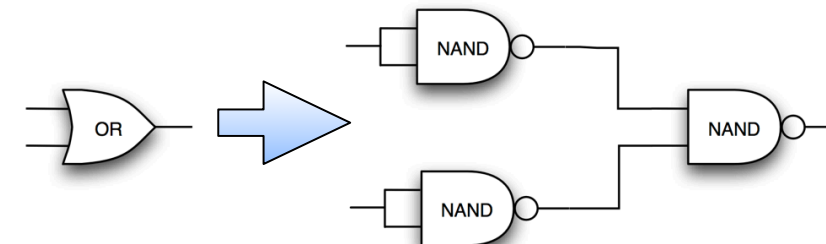
$$\bar{x} = \overline{x \cdot x}$$



$$x \cdot y = \overline{\overline{x \cdot y}}$$



$$x + y = \bar{\bar{x}} + \bar{\bar{y}} = \overline{\bar{x} \cdot \bar{y}}$$



# 同族関数

- 変数の交換、変数の否定、関数値の否定を施して出来る新しい論理関数は、リテラルが異なっているだけで形は同一であると考え、**同族関数**と呼ぶ

$$\text{例： } x \cdot y \rightarrow \bar{x} \cdot y \rightarrow x \cdot \bar{y} \rightarrow \bar{x} \cdot \bar{y}$$

$$\rightarrow (\text{関数の否定}) \rightarrow x + y \rightarrow \bar{x} + y \rightarrow x + \bar{y} \rightarrow \bar{x} + \bar{y}$$

- 10個の2変数論理関数のうち上記の8つは全て同族である
  - 残り2つは互いに同族

$$XOR = x\bar{y} + \bar{x}y \rightarrow EQUI = \bar{x}\bar{y} + xy$$

- 同様に論理関数の諸性質がp91-p97にまとめられている
  - 期末試験には出ませんが、自習しておくこと